



TITLE:

## 文化現象の凝集作用(二)

AUTHOR(S):

恒藤, 恭

---

CITATION:

恒藤, 恭. 文化現象の凝集作用(二). 經濟論叢 1927, 25(3): 321-339

ISSUE DATE:

1927-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128582>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號三第

卷五十二第

行發日一月九年二和昭

## 論叢

營業稅の課稅物件の地方分別難

法學博士

神戸正雄

文化現象の凝集作用

法學士

恒藤恭

純粹國家

法學士

作田莊一

## 時論

獨逸社會民主黨の農政綱領

法學博士

河田嗣郎

## 說苑

琉球の廢藩と日支兩屬關係の終末

法學博士

山本美越乃

植民及び植民地の意義

經濟學士

長田三郎

## 雜錄

英領東アフリカの現状と其將來

經濟學士

田島正雄

同盟罷業保險の現状

經濟學士

近藤文二

八日市の起源と歸化人

經濟學士

菅野和太郎

地方財政と累進稅比例稅

法學士

沙見三郎

## 法令

議院法中改正法律・震災手形處理委員會官制・公益質屋法施行規則・米及穀の輸入稅免除の件廢止

## 文化現象の凝集作用 (二)

恒 藤 恭

### 四 文化領域について

諸々の文化現象は各自に特有なる意味を有し、此れによつて一方には他の種類の諸文化現象から區別されるが、他方には同一の種類に屬する他の諸文化現象と共に同一の文化領域を形成する。而して、斯くして形成される諸々の文化領域は更に相合して共同の文化の世界を形成する。

「文化領域」なる概念は、元來、文化科學の一部門としての國家學なり公法學なりに固有であるところの「領域」又は「國家領域」なる概念との比論に基いて構成された概念であると思ふ。其れは單に「領域」なる語の借用もしくは轉用たるに止まるものではなく、斯かる語の轉用される所以は、一の場合におけると、他の場合におけるとで、この語によつて指稱される概念が、その具有する意味の上に重要な類縁性を有するからでなければならぬ。本來、領域は空間的な擴がり意味する。國家領域は地球の表面における立體的擴がりの一定範圍である。文化領域なる概念

は、種々なる意味において使用され得るであらうが、論理的もしくは認識論の意味において使用される場合には、文字通りに空間的なるひろがりの意味するものと解せらるべきではない。例へば、法律なる文化領域と經濟なる文化領域との間に如何なる論理的關係が成り立つかと問ふとき、又は二者は、社會の歴史的發展において、全體として如何なる相互的制約關係を示すかを問ふとき、何等か此れらの二種の文化領域の間に存する空間的關係が問題とされてゐる譯ではない。けだし此場合に、文化領域とは或る空間的ひろがりの意味するものとして概念されては居ないからである。然らば、何故に斯やうな、本來空間的概念をあらはす語を以て問題たる概念の名稱とする必要があるか。

各種の文化領域の中に各種の文化現象が與へられて居ると云ふ事柄は、同一の文化領域に屬する文化現象の各個は、同一の意味體系に屬するところの意味によつて規定されるものであること、しかも各自の具有する意味は他者の具有する意味に對して獨立性を有するものであること、そして此れらの關係は現實の世界に立脚して成り立つものであることを意味する。それ故、それ等の文化現象を總括したものを一體として視るときは、この總體的なるものは、現實の世界から抽象されたところの意味的單位の統一的集合態として現れる。斯かる形態を概念するに當り、空間的形象の媒介を利用するのは、經驗的實在の世界の根本的構造を洞察する上に屢々行はれる思

惟方法の一つの場合である。斯かる了解と考慮との下に、問題たる概念の名稱として空間的意味をもつ語を採擇することが理由ありとされる。

次には、何故に特に「領域」なる語が適當なりとされるかを吟味しなければならぬ。——一の文化領域の内部においては、それに特有なる意味的及び事實的法則が一切の現象を支配し、この法則を通じて同一の本質が顯現される。言ひかへると一の文化領域においては他の文化領域の意味法則の支配は排斥される。すなはち一の文化領域の中にあたへられる現象は、何らかの程度においてこの領域に同化し又は應化しなければならぬ。或る現象がAなる文化領域に本來的に屬するaなる文化現象たるのは、その現象がAに特有なる法則によつて専ら支配されるものとして理解されるからである。またBなる文化領域に本來的に屬するbなる文化現象が、文化領域Aの中に何等かの關係においてあらはれる場合には、bは或る程度においてAに特有なる法則の支配を被らざるを得ない。かやうな事態は、一の國家の領域の内部においては該國家の統治權が原則として他の國家の統治權の關涉を排斥して完全に自由にはたらくのと、其趣をおなじくするものである。そして、諸々の文化領域が並び存し、その間に交渉及び關聊を有する状態は、國際社會における諸々の國家領域の並立状態に著しく類似してゐる。問題なる概念の名稱として「文化領域」なる語を撰擇することの妥當なる所以は、上述したやうな事情から了解されるであらう。

經濟、法律、政治、宗教、道德といふ如き特殊的文化領域に對し、文化領域一般なる概念が定立される。他面において、諸々の特殊的文化領域を包括する全體的範圍としての文化の世界又は文化實在の概念を定立することが要求される。この要求は文化の世界の成立の根本的制約に胚胎する。

各個の文化領域は他の文化領域との關係において獨自の存立を有し、その内面においては其れに特有なる法則が諸々の現象を獨占的に支配すると言ふとき、諸々の文化領域は相互に關聯し交渉し得る地位に在ることが前提されてゐる。諸々の文化領域が共同の地盤の上に成り立つものであり、諸々の種類の文化現象が共通の基準的構造を有するのでなければ、各個の文化領域の存立の獨自性について語ることは、根本において意味を成さぬであらう。しかるに、人間の外的及び内的官能を通して與へられるところの原本的實在は、あらゆる種類の文化現象が構成される爲の原材料を提供し、あらゆる文化領域の成り立つ爲の基層を提供する。すなはち各種の文化領域の立脚する地盤は相合して一の共同的地盤を形成し、斯かる地盤の上に諸々の文化領域を包括するところの文化の世界が成り立つものと思惟し得られる。而して、この文化の世界において、諸々の文化領域は雜然として堆積し又は集存するのではなく、それらを内面的に關聯せしめるところの意味的法則によつて結合され、他方には事實的法則の支配の下に外面的に相交渉することが認識

される。

互ひに孤立して散在せず、一定の法則の支配の下に相關聯して共同の世界を形成する傾向をもつことは、現象一般の本質に屬する。諸々の文化領域並びに文化の世界の成立も亦、文化現象の本質に基くものに他ならぬ。而して文化の世界が單一の文化領域として成立しないで、諸々の文化領域をその中に包括するのは、文化現象成立の根本的制約に由來する。人類の努力に因り經驗的實在の世界に價値の實現、保存、發展が行はれる處に、文化現象はあたへられるのであるが、人類の努力の目標たる價値は、單一なる形態において存立せず、多様な形態を取つて顯現する。だから、價値を目標として行はれるところの人類の努力も亦これに伴つて多様な形態を示さざるを得ない。かくして文化領域の多元性は究極において價値の多元性によつて制約されると云はねばならぬ。

## 五 文化現象の凝集作用と擴散作用

諸々の文化現象はその成立の根據たる本質を固有する。すなはち文化現象の本質は文化現象の本質的内容を通して文化の世界に發現する。而して各文化領域は各種の文化現象の本質が現象において發現する實在的範圍を形成する。各文化領域において、それに特有なる文化現象の本質が

その發現の地盤を見出すのであるが、ある文化領域の内面にあたへられる一切の特殊的文化現象を通じて、その成立の一般化的原理たる現象の一般的本質と、其成立の特殊化的原理たる現象の特殊的本質とが區別されることは、前に述べた所である。而して現象が單に本質的内容のみを具有しつゝ成り立つことを得ず、つねに非本質的内容をも具有しつゝ成り立つのは、現象の世界の成立の根本的制約である。だから、或る文化領域において成り立つところの文化現象の一般的内容との關係において、その文化領域における諸々の特殊的文化現象の内容の特殊性を成すものは、特殊的、本質的内容のみに止まらず、これに加ふるに特殊的、非本質的内容を以てしたものである。

現象における本質的内容は本質的意味の法則によつて支配される。だから、若しも一の文化領域における諸現象が純粹に一般的、本質的内容及び特殊的、本質的内容のみを具有しつゝ成立するのであつたならば、該文化領域の内部にあたへられる一切の文化現象は、それに特有なる本質的意味の法則の見地から一義的に理解し盡くされ能ふであらう。しかるに、經驗的實在の世界においては、現象は本質的及び非本質的内容を併せ具有しつゝ成立する故に、一の文化領域の内部に與へられる諸々の文化現象の成立の態様は、本質的意味の法則の見地からしては洞察し盡くされず、別個の見地、即ち經驗的、事實の見地からして理解されることを必要とする。文化現象の



凝集作用は、この後の見地において構成される概念である。

現に歴史的に與へられてゐる諸々の文化領域を通じて、各種の文化現象の本質がそれに照應する個々の文化領域において發現する様相を、經驗的考察に訴へて吟味するときは、多くの種類の文化現象の場合において、次のやうな事實が目につく。——同一の文化領域の内面において文化現象の本質が諸々の文化現象の内容を通じて發現する仕方は一樣でなく偏りがある。すなはち或る種の現象の群れにあつては、現象の本質は比較的に純粹且つ明瞭に發現し、豊富なる且つ充實せる形態を呈示するために、原本的實在の裡にその文化現象を獨自の存在において認識することが比較的に容易である。しかるに他の種の現象の群れにあつては、現象の本質は比較的に不純粹且つ不明瞭に發現し、加ふるに貧弱なる且つ稀薄なる形態を呈示する爲に、その文化現象の存在は原本的實在の裡に埋没しやすく、吾々の意識によつて把握され難い。前の種類の現象にあつては、現象の内容の構成に役立つ素材が現象の本質の發現に向つて抵抗するところが弱く、より良く本質的内容の形成に適應する。しかるに、後の種類の現象にあつては、素材は本質の發現に向つて頑強に抵抗し、現象と本質とを距てる間隙が大であり、従つて現象の非本質的内容が本質的内容を壓倒せるが如き形狀をあらはす。前の場合にあつては、現象の本質は謂はゞ十分に素材を支配し利用して己れの姿を全く且つ豊かに顯現せしめる傾向が存するのであるから、この種の

現象の間には、現象の本質に基礎を置くところの法則の統制が比較的に顯著に行はれるけれど、後の場合にあつてはさうでない。或る文化領域の内部において文化現象の本質が個々の現象の内容を通じて發現するに當つて成り立つ所の斯かる二個の傾向は、相關的にのみその特徴を認識し得られるものであるが、文化現象の本質が同一の文化領域の中の或る種の現象の群れにあつては、凝集もしくは凝結の状態に到達する作用又は傾向を、文化現象の凝集作用又は凝集傾向と名づけ、他の種の現象の群れにあつては擴散もしくは分散の状態において發現する作用又は傾向を、文化現象の擴散作用又は擴散傾向と名づけることとする。

文化現象の凝集作用の行はれてゐる處では、一の文化領域は他の文化領域から判然と劃離され、或る種類の文化現象は他の種類の文化現象に對して顯著なる差異を呈示する。文化現象の擴散作用の行はれてゐる處では、事態は正に反對である。其結果として、文化の世界が諸々の文化領域によつて組成される仕方は特異の様相をあらはす。今一つの比喩を試みて——文化の世界の全體は一個の圓の形を成し、諸々の文化領域はこの圓の中心から引かれた若干の半徑により區分された若干の圓分に該當し、各個の圓分は異なる色彩を以て塗られて居り、しかもその着色は中心に近いほど淡く、圓周に近いほど濃くなつて居ると想定する。しかる時は、各圓分における色彩の濃淡は各文化領域における文化現象の凝集作用及び擴散作用の成立を表現するであらう。す

\* より精密には、文化現象の本質的意味の凝集作用と名づくるを可としやう。

なほ各圓分において圓の中心に近い處では文化現象の擴散作用が顯著であり、その爲に、各圓分は界線によつて相互に區劃されて居るもの、各者に特有なる色彩が稀薄である故に、相互にその特有の存立を識別され難く、圓の中心に愈々近づくときは、ほとんど無色となり、宛かも諸々の文化領域の相互的區劃は消滅し去つたかの如き觀を呈する。之に反して、圓周に近い部分は文化現象の凝集作用の旺盛なることを表現し、其處では各圓分の濃厚なる色彩のつくる差別の對照によつて各文化領域は瞭然と相互に識別され能ふ。但、各圓分における色彩が淡きより濃きに移り行く仕方は一樣でなく、文化領域の異なるにつれて、さまざまの不規則な態様が看取されるであらう。\*

如何なる文化領域を通じて斯かる事態が認識されるか、個々の文化領域において如何なる態様において斯かる事態が認識されるかは、經驗的觀察の結果の批判に俟たねばならぬが、一般的に見て、斯かる事態は先づ文化現象に關する常識に反映し、更に後者を通じて間接に又はそれを通さずして直接に文化科學に反映するのである。

## 六 文化領域と生活實在

文化現象の凝集作用と密接なる關係を有し且つ著しく此れと類似する現象に文化領域の獨立化

\* 茲に説く所は、生活領域としての文化領域相互の關係についても（後出三三頁參照）また歴史的認識の對象としての文化領域相互の關係についても妥當する。

作用又は文化現象の分化作用と呼ぶ可き所のものがある。

文化の世界といひ、文化領域といふも、吾々の素朴なる意識に直接に與へられた世界ではなく、文化科學的認識の對象として初めて十分なる存立を有する。文化科學によつて認識される文化實在が何等か超現實的なる又は非現實的なる世界ではなくて、現實の世界たる意義をもつと認められるのは、文化實在の構成に役立つ原材が吾々の官能を通じて與へられる内容であり、文化實在の地盤の底には感覺的内容によつて組成されるところの原始的實在の基層が横たはると思惟されるからである。文化の世界は自然の世界に對立すると云つても、二者は全然異なる基層に立脚して絶對的に隔離せる二個の實在たるものではない。文化の世界も自然の世界もひとしく同一の原始的實在の上に基礎をもつものであり、文化現象も自然現象もひとしく此原始的實在から其形成のための原材の供給を仰ぐ。同じやうに、諸々の文化領域の獨立性も相對的意義において理解されねばならぬ。同一の原始的實在の基層の上に展開するところの共同の文化實在の地盤の上にのみ、各種の文化領域は成立し得るのであつて、直接なる知覺を通じて吾々の接觸するのは、唯一個の文化的なる生活實在あるのみである。\*

文化實在もしくは文化の世界が文化科學的認識の對象たるのと異なつて、生活實在は人間の實踐的行動の世界を意味する。彼處では人間は既に形成されたものとしての世界に對立し、認識能

\* 原始的實在の上層に生活實在の層が展開し、更に其上に文化實在の層が展開する。但、前の二つの實在層の相互關係と後の二つの實在層のそれとは、論理的性質を異する。

力に依つて其世界の様相なり形態なりを觀察し理解せむとする。此處では人間は將に形成さるべきものとしての世界に對立し、實行能力に訴へて其世界を自己の欲する様相又は形態にまで建設し展開せむとする。事實的關係において生活實在は文化實在に先行し、後者の成立は前者の存在によつてのみ可能とされる。言ひ換へると、生活實在は文化科學的認識の出發點に横たはり、文化實在はその終點に横たはる。

前述の如く、文化領域は本來の意味における空間的廣がりをもつものではなく、その廣がりとは純思想的なる空間の意味において解せられねばならぬ。だから、文化の世界の内面に諸々の文化領域が並存すると云つても、後者は現實の空間の中に各自ことなる位置を占めつゝ吾々の知覺に現れるわけではない。しかも各個の文化科學は自己の着眼する特定の文化領域を他の諸文化領域から十分獨立せるもの、隔離せるものとして考察する態度をとる。斯かる考察の結果たる文化科學的知識が經驗的知識としての價值を有するのは、文化科學的考察の出發點たる生活實在に在るが、右の如き態度を正當ならしめる理由をあたへるのにならね。

文化科學的認識方法は經驗的實在の世界を以て人類の努力による諸々の價值の實現、保存及び發展の地盤と視ることを以て特色とするが、斯かる文化科學的認識方法のいとなみが無見當に陥ることなく客觀的確實性を具有し能ふ所以は、原本的實在の世界が人類の活動に因つて既に生活

實在にまで改態せしめられて居るからである。而して生活實在が論理的加工を受けるにより文化實在として認識され能ふのは、生活實在が單なる自然的過程を経て成立するのでなく、人類の意識的活動——殊に價值意識を伴ふ活動をその成立過程の成分として包容することに基く。價値の多元性は、人類の價值意識に反映し、異なる價値が異なる實現の條件を要求する事情と相俟つて、人類の活動の態様及びその所産の形態をして價値の多元性に照應するところの多元性を帶びしめる。しかも、生活實在は文化實在の如く單一なる目標を目ざして一面的に形成し展開されるものではない。實踐的生活において人類は諸種の生活内容をば謂はば同一の生命の流れのうちに發展し融合せしめるのであり、斯かる仕方によつてのみ人類の生活は其れに本質的な統一性を保持するのである。

人類の活動に對して意義をあたへるところの價値の差異に着眼し、異なる價値の見點からして意義をみとめられる人類の活動をそれぞれ總括して、之を生活方向とよぶならば、諸々の生活方向が生活實在のうちに融合せしめられ、統一せられる様相は、時代を異にし社會を異にするにより複雑多様である。

生活實在において人間は單に本能的に又は衝動的に活動するに過ぎないものではなく、また自覺的に、反省的に活動するのであり、常識はその際重要な役割を勤める。けだし同一の生活方

向に關する經驗は漸次により豊かに蓄積され、より十分に整理され、これに伴うて常識は次第に學問的性質を帯びるに至る。その結果、生活實在における個々の生活方向の發展は次第により大なる獨立性を取得し、より明瞭なる形態を提示するに至る。他面において、社會の歴史的發展の一定の經過において諸々の文化科學的認識努力が生まれ、既に常識の中に現れた傾向を發展し精練し、各自の立場から生活實在を考察して特有の文化領域を認識しやうとする。そして斯かる認識によつて獲得された成果は、常識に向つて感化を及ぼし、従つてまた諸々の生活方向の獨立化作用に對して影響する。斯くして、生活實在は本來唯一個の不可分の世界であり、また何處迄も斯かるものとして存続するけれど、その内面において、かの諸文化科學の對象としての諸文化領域に照應するやうな諸生活領域の並存状態を出現せしめる。この状態の成立は、一方には實踐的活動によつて支持されてゐるが、他方には常識に内在する文化科學的認識契機によつて促進され誘致されたものである。この意味において——これらの生活領域をも亦文化領域と呼ぶことが出来る。論理的には、文化科學的認識の所産として規定された文化領域の概念から出發して、生活實在其者の裡に展開せる文化領域の概念に到着するのであるが、事實的には、文化科學的認識は生活實在の裡に包容されて居る文化領域より出發し、論理的精練の道程をたどつて、諸文化領域により整然と組成された文化の世界の認識に到着することに努力する次第である。

科學的認識と常識との相違の一面は、前者が一定の目標を固執し一定の側面から對象の性狀を把握せむとする態度をとるに反し、後者は斯かる態度を或る限度において採用する場合もあるけれど、一般には斯かる態度に拘泥しない點に存する。文化現象の性狀の把握につき、文化科學的認識は、それが科學的認識として守らねばならぬ約束に基いて、その出發點よりして必然に文化領域の設定の理念を把持し、その終點において斯かる理念を能ふ限り十分に現實的たらしめることに努める。之に反して、人類の生活々動は此れに類した約束に拘束されつゝ開始され發展されたものではない。併しながら、人類の社會の歴史的發展の現在の狀態から過去に遡つて觀るときは、生活實在の内面において諸々の文化領域が或る程度の獨立性を取得して成立するに至つたことには、斯かる狀態の展開を促したところの必然的傾向が、人類の社會生活の存立發展を可能たらしめた諸條件の裡に包藏されてゐたものと推斷せざるを得ない。而して、斯かる必然的傾向に基因して行はれる文化領域の獨立化作用又は分化作用は、文化現象の凝集作用を惹起し、二者は相表裏して生活實在の發展の裡に現れつゝ、文化科學的認識に對して制約をあたへる意義をもつのである。

## 七 文化領域の分化作用と文化現象の凝集作用



社會生活に内在する諸生活方向が次第に展開するに因り、生活實在の單一的全體の内部に諸文化領域が或る程度の獨立性を取得するに至る事實を、文化領域の獨立化又は分化作用とよび、生活現象の單一的內容から諸種の文化現象の分化するに至る事實を、文化現象の分化作用とよぶ事とする。<sup>c\*</sup>

人類の社會生活の歴史的發展の原初においては、諸々の文化領域は現在の發達せる社會狀態において觀取されるころの相互に判然と區別し得られるやうな形態においては存立して居ない。共同の原本的實在の基層の上に、謂はば文化領域一般とも名づく可きやうな様相において文化の世界が成り立つてゐるのが、原初の社會狀態である。其れは生活實在が初めて單なる動物的存在の狀態から幾ばくか進化して、文化的生活內容の若干量を加へるに至つた狀態であるが、諸々の生活方向はなほ萌芽の形態において現れ、人間の生活々動は混沌として諸種の文化的契機を包含しつゝ成立する。社會的生活形式の見點からすれば、諸種の社會的結合體が未だその存立及び發達を開始するに至らず、社會生活の内面的組織は著しく單純であり未分化であるが、文化的生活形式の見點からすれば、以後の歴史的發展において其れぞれ獨立の領域として分化し展開すべきところの宗教、政治、法律、經濟、教育、道德、風習、藝術等の諸々の生活方向が、渾然として融合し又は雜然として混在せるまゝに、社會生活の統一的内容を形成してゐる。唯一二の例をあ

\* 茲にいはいゆる文化領域の分化作用と、社會學において調はゆる社會的集團の分化作用との間には、種々の密接なる關聯の存在することが考へられるが、二者は根本的に性質を異にする現象である。

げると、播種及び收穫の如き農耕的活動は、同時に宗教現象たり、經濟現象たり、政治現象たり、藝術現象たるの性質を有し、他の種族もしくは部族との戦争は、同時に宗教現象たり、軍事現象たり、經濟現象たり、道德現象たる性質を有し、呪術的動作は、宗教的、法律的、學問的、經濟的、藝術的等の諸意義を併せ有する。<sup>\*</sup>これに照應して、社會關係においては、階級的もしくは職業的差別がいくばくも確立せず、知能の方面においては、諸種の生活技術の専門的發達が幼稚であり、傳説、神話、呪文、歌謠等の形式の中に一切の學問的知識の萌芽が盛られてゐる。

諸々の民族において、斯かる原始の状態から如何なる社會的條件に基いて個々の文化領域の獨立化の作用が開始され、如何なる過程を経てこの作用が促進され發展されるかは、精細なる社會史的、文化史的研究を要する所であるが、社會生活の發展の一般的傾向は、原始狀態を脱却して文明狀態へと進む人類の諸集團が、これと平行してその社會生活の内面に諸種の文化領域の獨立化作用を成り立たしめる事實を示す。これに伴うて漸次に階級的及び職業的差別が發達し、各種の生活技術が専門化され、呪術的、宗教的知識から形而上學的知識が分化し、後者から更に科學的知識が分化する。而して斯かる文化領域の分化作用は他面において文化現象の凝集作用を伴ふのを常とし、二者は互ひに他を制約し助長する傾向をもつ。すなはち文化領域の獨立化が進むにしたがつて文化現象の凝集作用は顯著となり、後者の進行は更に文化領域の獨立化に對して動力

\* 農耕的活動又は呪術的動作を、例へば宗教とか經濟とか云ふ如き一個の文化領域の見點から考察することが、餘りに生活實在の線相から思想的に隔絶し過ぎる認識方法であると云ふやうなのが、原始社會の示す様相である。

を加へるのである。

文化現象の成立については、客觀的及び主觀的要素が制約をあたへる。客觀的には、文化的活動の目標たる價值は一定の本質を有し、これに基いて、經驗的實在における該價值の實現又は維持の上に一定の條件が必然に課せられる、文化現象の本質はかくして客觀的に定まる。主觀的には、價值が人類の價值意識のうちに内在すること、及び斯かる價值意識に基いて人類が價值を實現せむとする意志を有し、且つ其爲に必要な能力を具有することが、文化現象の成立の前提を成す。生活實在の裡に諸々の生活方向が現れるとき、上述の如き客觀的及び主觀的制約は必然にそのはたらきを示す。すなはち客觀的見點から觀れば、各種の生活方向に沿うて成り立つ文化現象は、恒にそれに特有なる本質を根據として文化領域の内面に散布する。主觀的見地から觀れば、それらの文化現象の本質につき人類は何等かの程度の意識を取得し、斯かる意識がそれらの文化現象に關して爲される人類の活動を通して、文化領域の内面における文化現象の成立に對して影響を及ぼす。

生活實在のうちに如何なる種類の生活方向が先づ明瞭に現れ、それ等が如何なる順序又はいかなる仕方で發展せしめられるかは、別問題として、一定の生活方向が特に顯著に發展せしめられる場合には、この生活方向に關して特殊の社會的地位が成り立ち、廣義における専門的知識及び

専門的技能が生まれ、その二者又は一者を所有する専門的職業者が現れる。これらの人々は、問題たる生活方向において目標たる價值につき旺盛なる價值意識を有し、その實現、保存、發展の方法又は手段につき優越せる知識及び技能を有する。彼等はまた其社會的地位に基いて、彼等の特に關與せる生活方向における文化領域の開拓につき強大なる關心をいだく。かくて彼等の活動の結果として問題たる文化領域における生活内容は豊富と複雑とを加へ、一方には文化財が多量に且つ多様に產出され、保存され、他方には斯かる文化財の產出、保存の爲にする人的及び物的組織が確立され精練される。茲において、これらの人々の努力を中心として或る種の文化領域の展開する處に、その種の文化現象の本質が比較的に明瞭に、比較的に充實せる形態において發現する傾向を生ずる。但この範圍においても、社會的要求、自然的事情、専門的階級の知識及び技能の發達程度、かれらの社會的勢力等の複雑なる條件に由り、右の如き傾向の支配は齊一的たるを得ない。他方において、問題たる文化領域に關して、その開拓に從事する人々の外に、その他の一般の人々が種々の社會的地位において何等かの寄與を爲す。この方面においても、問題たる文化現象が凝集狀態を成すこともあり得るが、一般的にはその擴散作用が行はれるのを通常とする。斯くして、生活實在の内面に一定の文化領域が分化するに伴うて、これに對應する文化現象の凝集作用及び擴散作用が複雑なる態様において成り立つのである。<sup>○\*</sup>

\* 茲に舉示したのは、文化現象の凝集作用及び擴散作用の成立を促す原因の主要なものたるに止まる。

或る種類の文化活動につき専門化が行はれ、一定範囲の人々が彼等の生活々動の大なる部分をあげて之に携はるときは、其處に他の種類の文化活動から現實的に隔離された文化活動の範圍として一定の文化領域が成立するかのやうな觀を呈する。そしてかの専門的階級に屬せぬ人々は、斯かる一定の閉鎖的活動範圍と交渉する限りに於いてのみ問題たる文化領域の中に立つと云ふ如き考へを抱くに至る。しかし生活實在の内部に諸々の文化領域の構成される態様は一層複雑である。一つの種類の文化活動の成立の基盤たる生活々動は、専らその種類の文化活動の存立をのみ支持すると云ふ關係にあるものではなく、其れが同時に二つの又はそれ以上の文化活動の存立を支持することは、可能なるのみならず、むしろ普通の現象である。だから、社會における現實の生活の一定範圍が、専ら或る種類の文化領域を實現すると云ふ意味において、閉鎖的な、純粹な文化領域を形成することはあり得ず、一方には斯かる一定範圍の生活領域は同時に他の種類の文化領域の基層を提供するものであるし、他方には斯かる一定範圍の生活領域を超えて、その外に横たはる廣汎なる生活領域の中にも、問題たる文化領域はその存立の地盤を見出すのである。唯、大體から見て、ある文化領域が右の如き一定範圍の生活領域を基層として展開せる部分において其種類の文化現象の凝集作用が比較的に顯著に行はれると言ひ得る。其爲に常識にとつて、該文化領域はこの範圍に局限されるかの如く考へられ、それに倣つて文化科學も亦似たやうな態度に出る場合を生ずるのである。